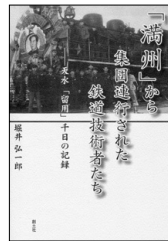


戦後中国における日本人「留用」から みえてくるもの―日中関係回復への道を探る―

山村 睦夫



四六判 216頁
創土社
【本体 1400円 + 税】

堀井弘一郎著
「満州」から集団連行された鉄道
技術者たち 天水「留用」千日の記録

中国や朝鮮、旧ソ連邦などからの日本人引揚げや留用（強制的徴用）に関しては、アジア太平洋戦争研究や植民地・占領地研究が進展する中でも、長く本格的研究がなされないできた分野であった（先駆的研究として若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社一九九一年）。戦争・植民地支配・敗戦・戦後占領という近現代日本研究の主潮流のなかにあつては、一見戦後過程で付随的に位置しただけでなく、その歴史事象自体が、戦後冷戦体制下で政治的意味を帯びていたためでもある（「引揚げ」問題の実體はなにか『世界』一九五三年四月号）。

本書も、こうした研究本格化の一端を担う論考である。現在までの引揚げ・留用研究においては、残留日本人の多くが在住していた中国東北を対象としたものが大半であり、中国関内に関しては限られたものに止まっている（富澤芳亜「在

華紡の遺産」森時彦編『在華紡と中国社会』京都大学学術出版会、二〇〇五年、山村睦夫「上海における日本人居留民の引揚げと留用」日本上海史研究会『建国前後の上海』研文出版、二〇〇九年参照）。そうしたなかで、本書は、甘肅省天水という中国奥地における日本人留用の実態を解明し、戦後留用の全体像構築に資しようとするものである（天水留用についてはNHK取材班『留用された日本人』NHK出版、二〇〇三年が僅かにふれている）。分析的方法的には、従来十分に明らかにされていない天水留用を、留用された人びとの生活や労働を軸として把握し、日中両国民関係のなかにおいてその意味を考えようとするものである。こうした点、著者は「天水での二年半余りの「留用」の史実をできうる限り詳細かつ具体的に叙述し、その歴史体験を記録し書き留めることを狙いとする」としつつ、「市井の

人びとの稀有な体験について、その歴史の意味を考ええ：（近年の厳しい日中関係の）打開の糸口を探る」基礎作業であると述べている。

各章ごとに内容をみてゆく。第一章「旧「満州」で「留用」された人びと」では、旧満州での留用について概括し、日本の敗戦時中国に約二〇〇万人いた日本人の引揚げや残留・留用の経緯や人数等を明らかにするとともに、残留に至る要因として、終戦直後の日本政府による各地在外居留民に対する「現地定着」方針の存在と中国側における国共内戦の長期化、戦後復興での各種技術者不足の事態を論じている。また、天水留用者の大多数が旧満鉄の鉄道部門で働く人びとであり、長期の留用方針のもとに集団移動させられたとしている。

第二章「どこへ連れて行くのか?」では、旧満州地域で留用された人びとが一九五〇年の朝鮮戦争勃発後の事態により、関内さらには奥地天水への移動を強制されていく経過が、留用者の眼を通じて描かれる。それは、帰国への願いが絶たれた行先のみえない長時間の鉄道の旅であり、途中帰国を求める運動も起こしながらの道程であったことが記される。

また、第三章「シルクロードの交通の要衝「天水」」は、天水留用生活を識る前提となる天水の地について、奥地的位置や温暖な気候、泥や黒煉瓦で作られた住居環境、水道や電

気のない生活などの事情を説明するとともに、家族比率の高かった天水留用者たちの特徴にふれ、日本人と中国人の交流のあり方に大きな影響を与えたものとして重視している。

以上の前提的な検討を踏まえて、第四章「「天蘭線」建設と技術者たち」は、日本人留用技術者たちの労働と技術移転の場となった天蘭線について、日本人留用者が天水に送り込まれた経緯を確認した後、約二〇〇人が二〇カ所以上の作業所に分散配置され中国人技術者・労働者との接触機会を多く有していたことを指摘している。しかし天蘭線建設自体や技術移転における日本人技術者の役割と位置づけについては必ずしも明確でない（鞍山鉄鋼業の関しては松本俊郎「満州国から新中国へ」および同「鞍山日本人鉄鋼技術者たちの留用問題」京大人文研『人文学報』第七九号が生産機構や留用技術者の位置なども含め詳細に分析している）。本書の持ち味は、むしろ機構的技術的分析よりも日本人技術者たちの「労働模範」などと評価されたような勤勉ぶり、「名実ともに技術的中核として貴重な存在」と目される側面の解明や、他面中国側からは公式にも諸文献や回想録などでも、技術貢献どころか日本人の存在そのものについて一切ふれられていない事情・政治的意味の検出などにある。

また、第五章「日々の暮らしのなかで」では、留用者たち

とその家族の日常の暮らしぶりにふれている。天水の暮らしも、職場内同様日中戦争を経て反日感情にとらわれた中国の人びとのなかでの生活であったが、強制的な留用や長距離の移動を強いてきたこともあり意外なほどの手厚い待遇が確保されていたこと、しかし、当該地の絶対的貧困、水や衛生面での生活的苦難が伴ったことを幾多の留用者たちの声で明らかにしている。他方で、中国の人や子供たちと近所や学校で接触しながら次第に仲良くなっていったことが心温まるエピソードとともに語られる。著者は、これらの交流について「日中両国民の労働と生活両面における日常的交流が人間としての共感を生み、天水会の活動など今日まで続く市井の人びとによる民間交流の原動力となった」と評している。

さらに第六章「異国で学ぶ小学生たち」、第七章「銃殺刑を見せられる子供たち」では、子供たちの生活を通じた日中間の豊かな人間的交流の事情が明らかにされている。そこでは、遊びやスポーツを通じた政治の垣根を越えて仲良くなつていく有様や中国の生徒と机を並べ中国語による授業に必死に喰い付いてゆく姿、また日本人生徒に接した中国人教師たちの暖かく細やかな配慮と現在に至るまでそれら教師たちを慕う日本人生徒の回想など、天水での学校生活の様相が生きて生きと叙述されている。併せて、留用日本人たちが子供たち

の「思想偏向」の問題に直面せざるを得なかったことを明らかにしている。

第八章「突然の集団引揚げ」では、一九五三年の突然の帰国方針決定の経緯および日中政府の対応と帰国事業の性格が検討される。ここでも留用者たちと現地の人びとの相互的関係に焦点が当てられている。最後に、第九章「第二のふるさと」として「では、留用者たちの帰国後に眼を向け、留用者自身の受け止めと帰国者が直面した生活的政治的難題が考察される。日本での職探しや生活不安定などの困難や世間の眼の冷たさと差別、日本の治安当局による監視などの事態が指摘されてもいる。帰国者たちは、帰国翌年に「天水会」を立ち上げ、回想記を寄せ、相互交流や現地訪問などを続け、いつまでも天水を忘れないという。著者はこうした民衆的交流の歴史的経験のなかに日中の相互交流の可能性を見いだしている。

最後に、本書が明らかにしたものと残された課題についてふれておきたい。第一に、満州・朝鮮を中心に引揚げ・留用研究が進むなかで、天水という中国奥地に移送された満鉄技術者たちの留用の実態、とくに人民共和国下のそれを、丹念な聴き取りをも活用して明らかにしたことである。このことよって、留用の全体像を把握する道筋が開かれよう。関連

していえば、中国東北などでの先行研究があるなかで（松本前掲書および長見崇亮「満鉄の鉄道技術移転と中国の鉄道復興」『日本植民地研究』第一五号）、その比較において天水での特徴を明確にするならば、天水・中国留用の意味をより把握し得たものと思われる。

また第二には、天水留用について、留用技術者とその家族の労働と生活を軸として、子供たちの生活も含め留用者たちの歴史体験をビビッドに描いていることである。それは、天水会の会報の丁寧な読み込みや関係者の聞き取りによって可能になったものであるが、同時に著者の、市井の人びとの歴史体験を明らかにしその意味を深めようとする姿勢の反映でもある。かかる視点は、負の面に対する過度の集中という偏りを改め、近現代日中関係の全般と興行への理解を深めるべきとする提言（鹿錫俊「戦後中国における日本人の『留用』問題」『大東アジア学論集』第六巻）に呼応するものでもあろう。

もちろんいまだ検討が果たされていない論点も見受けられる。そのひとつは、帰国後における生活や日本社会の引揚げ受容のあり方が部分的言及に止まっていることである。帰国後の就業や居住のこと、遭遇した引揚者差別のことなど、引揚者・留用者、なかでも新中国下で生活した留用者が帰国後直面し背負い続けた周辺日本社会による排除的対応あるいは

引揚者や留用者をめぐる議会討議や国民世論の動向について明らかにすることは不可欠の課題であろう。この点、阿部安成・加藤聖文「『引揚げ』という歴史の問い方 上下」（『彦根論叢』第三四八・三四九号、資料・文献についても論及）は、引揚げや留用という事態が戦前日本の植民地支配や戦争と結びついたものであり、日本人全体の歴史認識の問題と切り離しがたいことを指摘している。

また、引揚げや留用に強く影響を及ぼした戦後冷戦体制における国際政治や国内政治の動向がさらに解明される必要がある。本書においても留用が当時の内外政治の意向に左右されている様相にふれているが、断片的であることは否めない。国共内戦や米政府および国民政府の動向、中ソ関係の変化などそれぞれに複雑な影響を与えているが、天水居留者に関しても中国新政府の政策展開のなかで明確に位置づけることが必要であろう。

（やまむら・むつお 和光大学名誉教授）